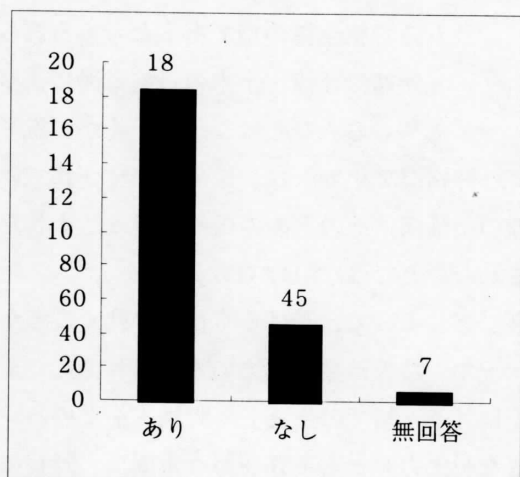


IV 野宿生活の類型化

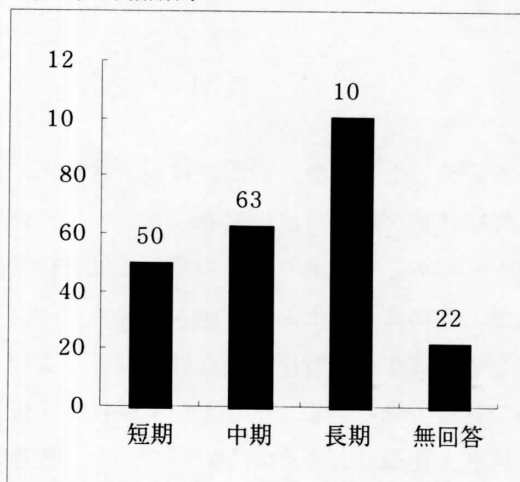
1. 類型化の基準

野宿生活へ至る経路、野宿期間、野宿経験回数を基準として野宿生活者の類型を考えることができる。具体的には、①「普通の」生活から直接野宿生活に入るかそれとも釜ヶ崎での「日雇い労働者」としての生活を経て野宿生活に入るか、②現在の野宿生活は短期であるかそれとも長期であるか、③現在の野宿生活は「初めての」野宿であるかそれとも過去に複数回野宿を経験しているか、という3つの基準にしたがって野宿生活者を分類することができる。この基準となる3項目の単純集計はすでに(Ⅱ-1)の「野宿生活の基底要因」の節で提示してあるが、ここでもう一度示しておこう。

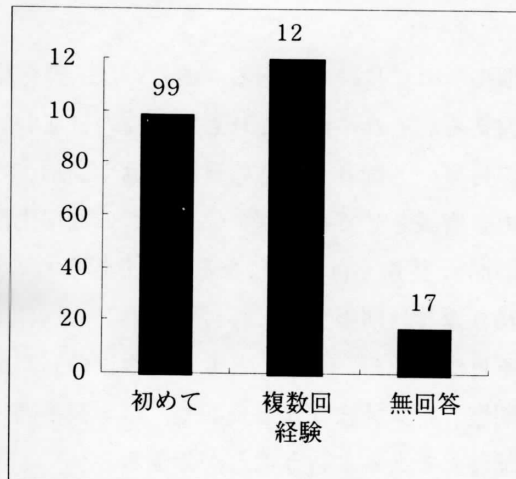
(図1) 釜ヶ崎経験



(図2) 野宿期間



(図3) 野宿経験

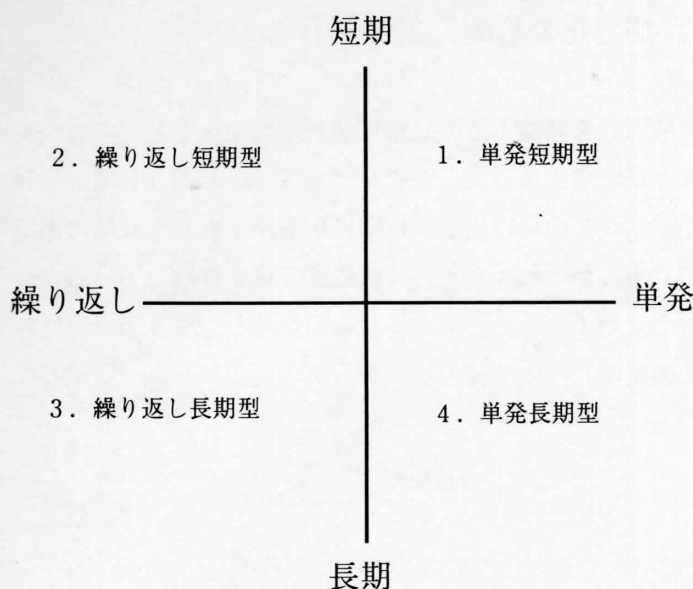


2. 野宿生活の4類型

野宿生活の「期間」と「回数」というファクターの組み合わせを考えると、そのパターンは、次の図の4パターンが論理的には可能である(図4)。

「1. 単発短期型」は、「初めての野宿で、しかも野宿を始めてからまだ日が浅い」そのような

(図4) 「期間」と「経験」の組み合わせに基づく4類型



野宿のタイプである。この野宿がそのまま長期化して「野宿生活」が確立されることもあれば、単に一時的・偶発的な野宿で終わることもあるだろう。その後の「繰り返される野宿」の出発点となる場合もある。いずれにしても、それは「野宿生活への入り口」である。この「最初の野宿」がその後どのように「展開」していくのかということの考察がこの節の目的でもある。

「2. 繰り返し短期型」は、釜ヶ崎の「現役」日雇労働者に典型的に見られる野宿生活の型であると考えられる。釜ヶ崎で建設・土木の日雇労働に従事している人びとは、その多くが、就労

の不安定性と生活基盤の脆弱性に規定されて、日常的に「野宿（アオカン）」を余儀なくされている。野宿は釜ヶ崎の日雇労働者にとっては、いわば彼等の生活構造そのものの内部に組み込まれたものとしてあるのであり、その意味では野宿は決してまれなことではないのである。

景気の変動によるセンター求人数の減少や、体調不良などによって、しばらく仕事に就くことができなければすぐに野宿をしなければならぬような状況で、彼等は生活している。それゆえ、釜ヶ崎で日雇労働者として生きていく過程で、彼等の多くは「釜ヶ崎での生活」と野宿生活とのあいだを何度も往還せざるをえない。ただし、彼等が「良質な労働力」として存在しうる間は、野宿生活の期間は相対的に「短期」にとどまるであろう。仕事に就くことができれば、彼等はただちに野宿生活からは足を洗うことができるからである。

「3. 繰り返し長期型」は上で述べた「繰り返し短期型」の延長線上にある。あるいは、野宿生活の「繰り返し」が不可避免的にたどりつくところとも言える。それゆえ、これも釜ヶ崎の日雇労働者に多く見られる野宿生活のタイプである。釜ヶ崎の日雇労働者が、その重筋労働や加齢、さらには繰り返される野宿生活などによって、その労働力を磨滅させてゆけば、徐々にこの野宿生活の繰り返し（あるいは「釜の生活」と「野宿生活」との間の往還）は困難になる。繰り返される野宿生活はだんだんと長期化し、その結果として「3. 繰り返し長期型」へと移行し、最終的にはその「往還」が途絶し、「釜の生活」へともどることは不可能になる。少なくとも、「現役の」日雇労働者として戻ることは不可能になる。「繰り返し短期型」→「繰り返し長期型」は、釜ヶ崎の日雇労働者に最も典型的に見られる野宿生活の「型の推移」であると言える。

「4. 単発長期型」とは、「初めての野宿生活」がそのまま長期間継続される場合である。ここでは、往還を可能とする野宿生活以外の「もう一つの空間」が欠如しているのである。一度野宿生活に入ったら、もはや出て行くことのできる場が容易にはみつからない、そういった状況にいる人の場合は、最初の野宿生活は必然的に長期化する。上で指摘したように、往還を可能とする「もう一つの空間」として釜ヶ崎があった。そして、少なくとも今回の調査に限って言えば、釜ヶ崎以外に「もう一つの空間」は存在しなかった。とすれば、釜ヶ崎での日雇労働者としてのキャリアを持

たずに、直接的に野宿生活に入ることを余儀なくされた人々は、この「単発長期型」の野宿生活を強いられる可能性が高いのではないだろうか。このことを、実際の聞き取り調査のデータで確認して見よう。

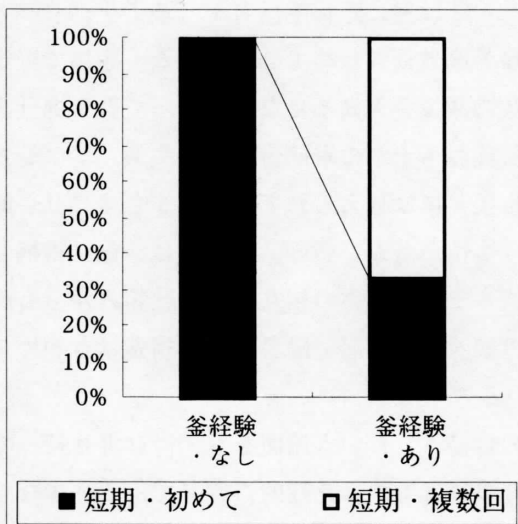
3. 「野宿生活の4類型」と「釜ヶ崎」

次の(表1)と(図5)から(図7)は、今回の聞き取り調査の対象となった、236人の野宿生活者の「釜ヶ崎での就労経験の有無」、「今回の野宿の期間」そして「過去の野宿経験の有無」についてのデータを3次元クロス表にまとめたものである。なお、ここで「短期」とは今回の野宿が「1ヵ月未満」、「中期」は「1ヵ月以上1年未満」、「長期」は「1年以上」であるということの意味している。さらに、このクロス表では「無回答」は省かれているので合計人数は236人よりも少なくなっている。

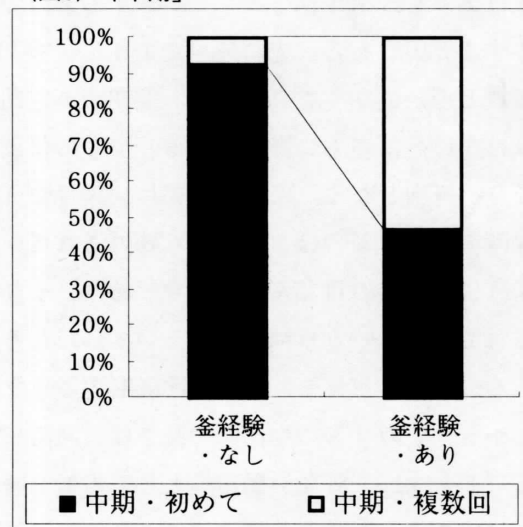
(表1)

Coun Expecte Deviation	短期 初めて	短期 複数回経験	中期 初めて	中期 複数回経験	長期 初めて	長期 複数回経験	
釜ヶ崎 経験 なし	9 3.9505 5.0495	0 5.82178 -5.8218	13 -7.06931 5.93069	1 5.19802 -4.198	14 8.73267 5.26733	5 11.2277 -6.2277	42
釜ヶ崎 経験 あり	10 15.0495 -5.0495	28 22.1782 5.82178	21 26.9307 -5.9307	24 19.802 4.19802	28 33.2673 -5.2673	49 42.7723 6.22772	160
	19	28	34	25	42	54	202

(図5) 「短期」

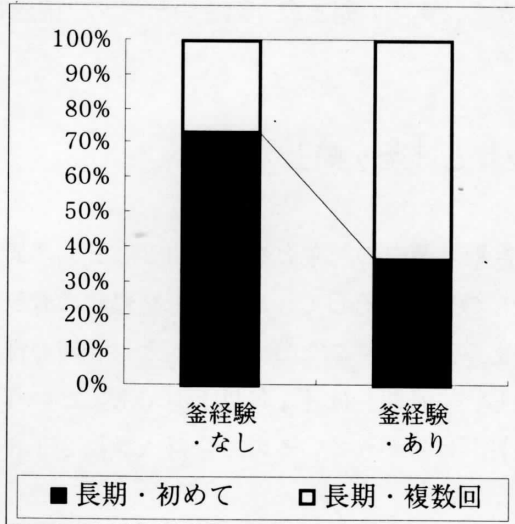


(図6) 「中期」



釜ヶ崎での就労経験のある野宿生活者は今回の野宿以前に複数回野宿生活を経験したことがある人が多く、それに対して、釜ヶ崎での就労経験がなく、直接に野宿生活に入った人は、その野宿生活期間の長短を問わず、今回が「初めての野宿」である場合が多いという傾向が、この表とグラフにはっきりと示されている。釜ヶ崎での就労経験がある野宿生活者の場合は、野宿生活と「釜の生活」との間を往復しながら「短期」(28人)→「中期」(24人)→「長期」(49人)と推移し、そうではない野宿生活者の場合は、「最初の野宿」がそのまま、「短期」(9人)→「中

(図7) 「長期」



期」(13人)→「長期」(14人)と長期化しているのだと考えられる。

以上のように、野宿生活の持続あるいは長期化は、そこに「繰り返し」のモメントを含む場合とそうでない場合の二つの型があることがわかる。そして、この「繰り返し」を可能としている(もしくは必然化している)ファクターは釜ヶ崎という「もう一つの空間」に存在していると考えられるのである。それでは、このファクターとは何であろうか。

4. 野宿生活の「サポート資源」としての「釜ヶ崎」

基本的には、おそらく、次の三つのファクターがこの「繰り返し」を可能としているのである。

- ①釜ヶ崎の日雇労働者の生活構造の本質的な脆弱性
- ②就労の相対的な容易さ
- ③野宿生活から脱出するための社会的制度の存在

①は人々を野宿生活へとプッシュする要因であり、②と③は逆に野宿生活者を「釜の生活」へとプルする要因である。先に述べたように、釜ヶ崎の日雇労働者はきわめて「ささいな」事情で野宿することを余儀なくされている。定期、不特定の求人数の減少、天候不良などによって数日間仕事に就けなければ直ちに野宿である。少しの体調不良でも建設・土木の重筋労働では失業(アブレ)となり、野宿となる。この背後には、彼等が「普通の市民」には与えられているさまざまな社会的な保障のシステムのほとんどから疎外されているという事情が潜んでいる。さらには、先に指摘したように、彼等のほとんどが単身であり、それゆえ親族ネットワークの相互扶助の仕組みからも疎外されているという事情もある。いずれにしろ、多くの釜ヶ崎の日雇労働者の生活構造はきわめてもろく、ほとんどシームレスに野宿生活とつながっているのである。

しかし、この「釜の生活」の脆さは、同時に「生活の容易さ」という側面をも同時に併せ持っている(②と③)。日雇労働市場としての釜ヶ崎では、仕事に就くのは比較的容易である。少なくとも、体さえ丈夫であれば、ほとんど何の資格や学歴、さらには保証人といったものを必要とせずに仕事に就くことができる。さらには、住居に関しても、その質や値段はともかくとしても、お金さえ払えば、一切の身元保証や頭金・敷金といったものを必要とせずに部屋を借りることができるのである。

脆弱な日雇労働者の生活構造を幾分かでもサポートし、保障するための公的な施設や機関、制度が釜ヶ崎には存在しており(たとえば大阪市立更生相談所、西成労働福祉センターなど)、それらはほとんど無制限に開かれている(住民票や身分証明書などを必要としない)。それらを利用する

ことによって、野宿生活から「釜の生活」へともどることはかなり容易になる。また、各種の民間ボランティア組織による野宿生活者への支援活動や相談、物品の供与等も活発に展開されており、これらももどるための手段として利用可能である。

このような「もう一つの空間」としての釜ヶ崎をささえている仕組みが、先の「往還」を比較的容易にしているのである。しかし、ここで強調しておかなければならないことは、こうした仕組みによって「往還」が可能であるためには、最低限二つの条件が満たされなければならないということである。一つは、釜ヶ崎が日雇労働市場として、ある程度順調に機能しているということ。もう一つは、個々の労働者が各自の労働能力を保持していなければならない、ということである。釜ヶ崎では日々自己の労働力を販売することによってのみ生活の維持は可能となる。それゆえ、朝のセンターに求人手配のマイクロバスが1台も来なければ、あるいは、その人が重筋労働に耐えるような健康状態になれば、いかにさまざまなサポートの仕組みがあったとしても、釜ヶ崎の日雇労働者の野宿は不可避なのである。

(表2)

行政への要望の有無	人数	比率
あり	128	54.2%
なし	80	33.9%
無回答	28	11.9%
合計	236	100.0%

要望の内容	人数
仕事が欲しい	60
住居が欲しい	16
高齢者対策	10
福祉全般への要望	7
野宿生活者や高齢者のための施設への要望	6
野宿生活のための便宜を	10
野宿生活者への差別・排除への抗議	9
治安対策への要望	3
その他の要望	31
政治・行政への不振の表明	40

このことは、労働者自身が、そして野宿生活者自身が最も痛切に自覚していることでもある。たとえば、次の(表2)は、236人の野宿生活者に対して「行政への要望」をたずねた、その回答を集約・整理したものである(回答の具体的な内容は巻末に資料として収録されている)。この集約結果からもわかるように、野宿生活者にとって(少なくともまだ自分は働けるし、働きたいと考えている人にとって)最も切実な「要望」は「仕事が欲しい」ということであった。このことは、現在は野宿していない釜ヶ崎の「現役」労働者にとっても、同様であるはずである。そして、野宿生活者のなかに、こうした「仕事が欲しい」という要望が強いという事実は、現在の釜ヶ崎がその労働市場という側面において何らかの機能不全を生じつつあるのではない

いか、ということをも予想させるのである。これまでの、そして現在の、釜ヶ崎の根底をささえてきたものは、日雇労働市場としての機能である。もしも、この機能が釜ヶ崎から失われれば、その他のもろもろの補助的仕組みはその存在意義を根底から失ってしまうことにもなるであろう。

さらに、個々の野宿生活者に即して言えば、彼等が②や③の仕組みを利用して「現役」に復帰しうるためには、最低限、彼等の労働力が建設・土木作業に耐える程度に「保全」されていなければならない。それが、純粹の被救恤民として釜ヶ崎に滞留するのではなく、「現役」の労働者として復帰するためのミニマムな条件である。それでは、野宿生活者や現役日雇労働者の「労働力の保全」のためのサポート体制は先の「仕組み」のなかに完全に組み込まれているであろうか。

次の(表3)は、236人の野宿生活者の「健康」状態を示したものである。調査対象者の44.5%にあたる105名の人々が体調は「悪い」と訴えている。この数値自身もきわめて大きく問題な

のだが、それ以上に問題なのは、そうした状況に対して、個々の野宿生活者が有効な対処をなしていないという事実である。「悪い」と回答した105名中63人（60.0%）が、何の対処も施していないのであり、病院で治療をしている人の比率はわずかに7%程度にすぎないのである。釜ヶ崎の現役労働者も含めて、大部分の野宿生活者は健康保険制度からも疎外されている。そのような人々にとって、もしも健康保険制度以外の何らかの健康維持・治療の仕組みが存在しなければ、病気や怪我は直ちに労働力としての無価値化につながる可能性がきわめて高いのである。ただでさえ、野宿という過酷な生活環境においては、肉体的・精神的な消耗は激しく、それゆえ、何らかの特別な「労働力保全」の体制が社会的に整えられないかぎり、彼等の労働能力は急速に磨滅していくだろう。野宿を初めてから入院したことがあるかという質問に対して75人（31.8%）もの野宿生活者が「入院した」と答えていることが、その証となっている。そして、この労働力の磨滅は同時に「釜の生活」への復帰を不可能にしてしまう。このデータはこのような危険性が現実存在しているということを如実に示しているのではないだろうか。

(表3)

健康状態	人数	比率
悪い	105	44.5%
良い	124	52.5%
無回答	7	3.0%
合計	236	100.0%

手当	人数	比率
何もしていない	63	60.0%
薬	11	10.5%
病院	7	6.7%
その他	8	7.6%
無回答	16	15.2%
合計	105	100.0%

入院	人数	比率
あり	75	31.8%
なし	144	61.0%
無回答	17	7.2%
合計	236	100.0%

入院経路	人数	比率
救急車	30	40.0%
市更相	2	2.7%
医療センター	3	4.0%
その他	4	5.3%
無回答	36	48.0%
合計	75	100.0%

こうした、きわめて厳しい状況にあって、野宿生活者がとりうる数少ない対応策の一つが「生活保護法」に基づく「医療保護」制度の利用である。入院者75人中30人（40%）が救急車による緊急入院である。彼等が「まともな」医療を受けることができるのは路上や仕事の現場で倒れたときだけである。このような場合にだけ、彼等は「医療保護」制度によって入院し、治療を受けることができるのである。そうなる以前に彼等がとりうる手段はほとんどないように思われる。

このように見てくると、釜の生活と野宿生活の繰り返しは、肉体の磨滅を伴いつつ、野宿生活の長期化をもたらす、最後には「往還」サイクルは途切れてしまうことになる、ということが了解されるであろう。

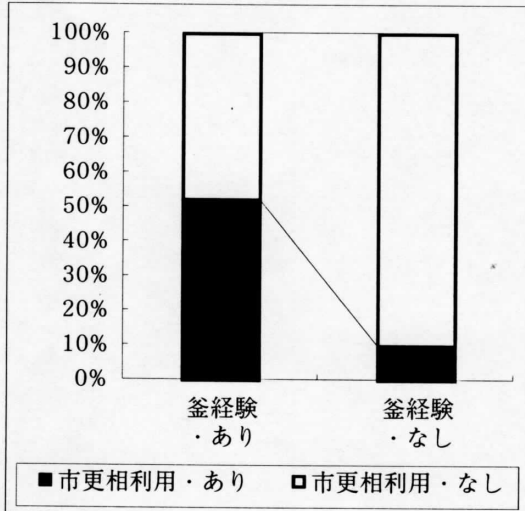
5. 「釜ヶ崎を経由しない」野宿生活者について

以上簡単に釜ヶ崎と野宿生活との間の往復を伴う野宿生活の長期化について見てきたわけだが、釜ヶ崎での就労経験がなく、直接的に野宿生活に入った人の場合は、この野宿の長期化による磨滅

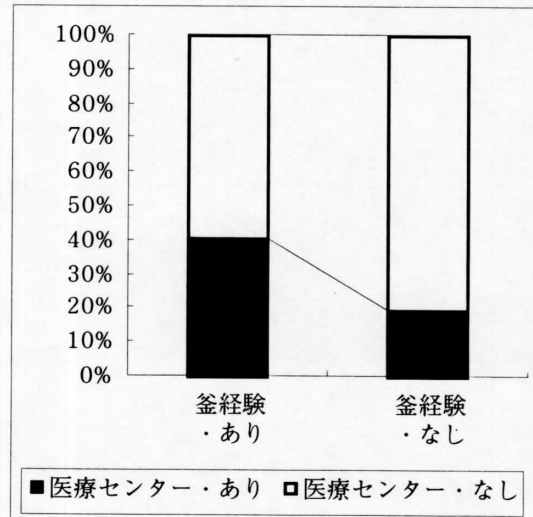
の過程は、よりストレートなかたちで進行するものと予想される。今回の調査では、こうした野宿生活者は聞き取りの対象者の数としては多くはないが、いくつかの点で、釜ヶ崎経験者とはきわだった特徴を示している。そのうち、ここでは、先に述べた「往還」を可能としている社会的仕組み（社会的諸資源）へのアクセスの違いについて、聞き取り調査から得られたデータに基づいて検討する。

以下の（図8）から（図10）は、野宿生活者を「釜の生活」へと引き戻すプル要因（野宿生活の「サポート資源」）の制度的な中核に位置づいていると考えられる「大阪市立更生相談所」と西成労働福祉センター内にある「社会医療センター」、および野宿生活者支援の民間ボランティア活動の代表とも言うべき「炊き出し」支援活動の野宿生活者による利用状況を、釜ヶ崎での就労経験の「あり」「なし」のグループ別に比較したものである。これらの三つのグラフから容易に読み取れるように、釜ヶ崎での就労経験が「ない」野宿生活者は、いずれの「サポート資源」に対しても、

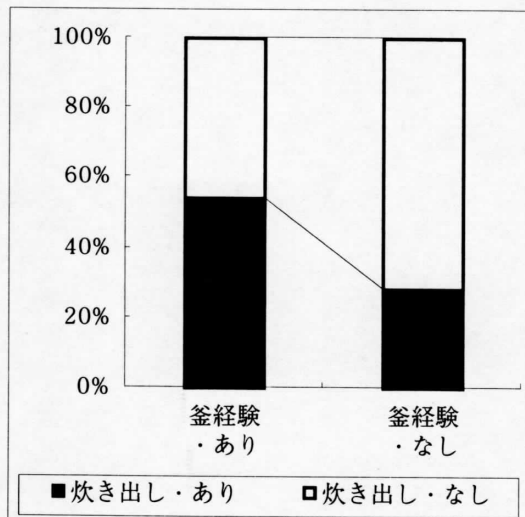
（図8）「釜経験」と「市更相利用」



（図9）「釜経験」と「医療センター利用」



（図10）「釜経験」と「炊き出し利用」



そのアクセスと利用の程度は有意に低くなっている。特に、市更相の利用率は低くなっており（10%）、このことは、彼等が自分の生活全般にわたってさまざまな困難に遭遇しても、ほとんど公的機関を利用していない（あるいは利用できないでいる）ということの意味しているであろう。それに対して、釜ヶ崎での就労経験が「ある」野宿生活者の場合の利用率は53%となっており、彼等の生活にとっての市更相の占める重要性がうかがえる。彼等はしばしば、市更相に対する不満をもらし、それは聞き取り調査の過程でも何度も耳にしたのではあるが、こうした不満は逆に見れば、そ

れだけ市更相が彼等の生活にとって重要なサポート資源であることの表明であるとも言えるだろう。この市更相に比べると、「医療センター」と「炊き出し」の利用率は、釜ヶ崎での就労経験が「ない」野宿生活者の場合においても、若干高くはなっているが（それぞれ19.5%と28.2%）、それでも釜ヶ崎での就労経験が「ある」野宿生活者のそれ（40.9%と54.2%）と比較すれば大幅に低くなっている。

釜ヶ崎での「生活のかたち」を学習していない彼等が、特殊「釜ヶ崎的な」こうしたサポート資源を利用できないのは当然ではあるのだが、現段階での大阪市の福祉行政システムのもとでは、「住所不定」者である野宿生活者が利用できるサポート資源はきわめて希少であり、そうした現状で、わずかに存在するこうした資源を彼等が利用していない（あるいは利用できないでいる）という事実は一つの大きな問題ではないだろうか。

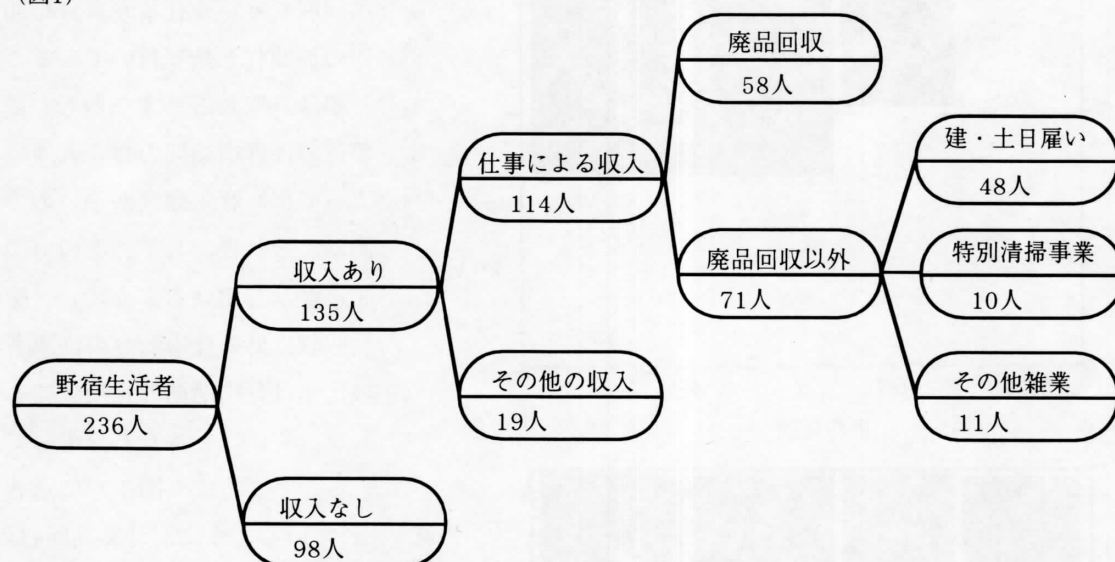
V 野宿生活者の収入と仕事

1. 収入から見た野宿生活者の類型

ここでは、野宿生活者の具体的な「生活」の現実に即して、その生活基盤について考える。野宿生活者の場合も「普通の市民」の場合とまったく同様に、その生活のありようの大枠を規定しているのは、まず第一に、彼等が獲得することのできる、生活のための物的資源（衣食住を始めとする諸資源）の量と質である。そしてこれらの資源は大別すれば、商品として購入される場合とそうでない場合とにわけられる。前者を規定しているのは当然のことながら、野宿生活者が獲得する「収入」である。今回の聞き取り調査の対象となった236人のうち「収入がある」と回答した野宿生活者は135人（57.2%）であり、「収入なし」は98人（41.5%）であった（無回答は3人）。ここではまず最初に、野宿生活者の収入の実態についてデータに基づいて検討する。

次の（図1）は236人の収入形態を要約したものである。ここでも、無回答が省かれているので合計は236人にはならない。まず最初に、「収入あり」と回答した135人の収入は、その源泉に応じて「仕事による収入」と仕事によらない「その他の収入」に大別される。前者は114人（「収入あり」グループの84.4%）であり、後者は19人（14.1%）である。野宿生活者の収入の大部分は仕事によって得られた収入なのである。

（図1）



次に、野宿生活者の主要な収入源である仕事とは、どのような仕事であるのかということを確認しておこう。（図1）からもわかるように、野宿生活者の仕事はまず最初に「廃品回収」という仕事と、「廃品回収以外の仕事」に大別され、さらに

（表1）

廃品回収以外の仕事に従事

廃品回収に従事	Coun	いいえ		
		いいえ	はい	
いいえ		0	60	60
はい		41	7	48
		41	67	108

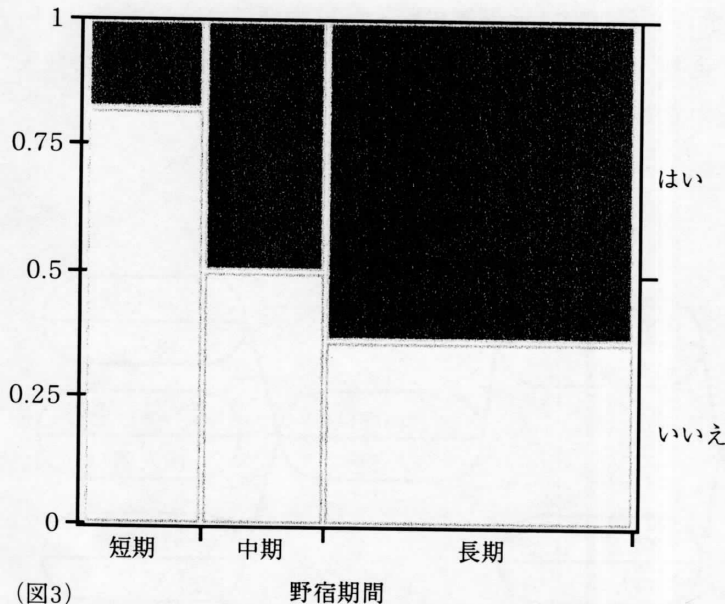
後者は「建設・土日雇労働」「特別清掃事業への従事」「その他の雑業」の三つに分類することができる。すなわち、野宿生活者がその収入を得るために従事している仕事は、「廃品回収」、「建設・土日雇労働」、「特別清掃」、「雑業」の4職種である。その中でも「廃品回収」と「建設・土日雇労働」が野宿生活者の仕事の中心をなしていることが上の図からわかるであろう。ところで、（表

1) は仕事によって収入を得ている114人についての、「廃品回収への従事の有無」と「廃品回収以外の仕事への従事の有無」という2変数のクロス表であるが、これを見ると、両方の仕事に従事している人はわずかに7人にすぎず、それゆえ、この二つの仕事は、その担い手が層としてかなり明確に分離されているのではないかと予想される。それゆえ、収入と仕事を基準として野宿生活者を分類するとすれば、野宿生活者は大きく「収入なし」層、「廃品回収」従事者、「廃品回収以外の仕事」への従事者の3グループに分けることができるであろう。そこで次に、これらの仕事の担い手の特定を試みてみよう。

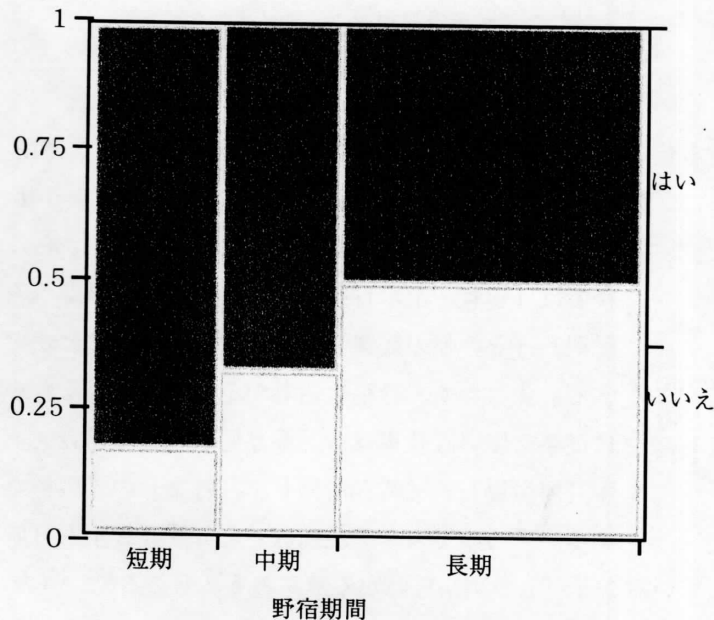
2. 「収入あり」層について

まず最初に、収入がある野宿生活者を対象として、その主要な二つのサブグループである「廃品回収」従事者と「廃品回収以外の仕事」への従事者について、両者を比較対照しつつ、その生活の特質を探って行こう。(図2)は「野宿期間」と「廃品回収への従事の有無」との間の関連をみた

(図2)



(図3)



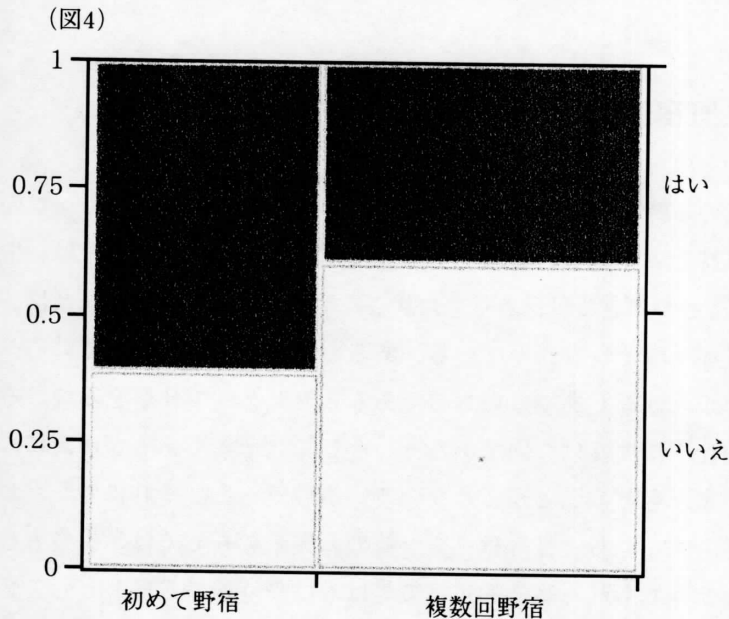
ものである。野宿期間が長期化するにつれて、廃品回収に従事する人の割合が高くなっていることがわかる。ここから、「廃品回収」という仕事が、野宿期間の長期化と結び付いていることが読み取れる。すなわち、この仕事は野宿期間の長い人々によって担われる傾向が強いのである。それに対して、次の(図3)が示しているように、「廃品回収以外の仕事」への従事者の比率は野宿期間の長期化にともなって、はっきりと減少している。ところで(図1)に示さ

れているように、「廃品回収以外の仕事」の中心をなしているのは「建設・土木日雇労働」であった(「廃品回収以外の仕事」に従事している71人中の48人が「建設・土木日雇労働」に従事している)。とすれば、このことは一体何を意味しているのであろうか。

推論を進める前に、この二つの仕事への従事と「野宿経験回

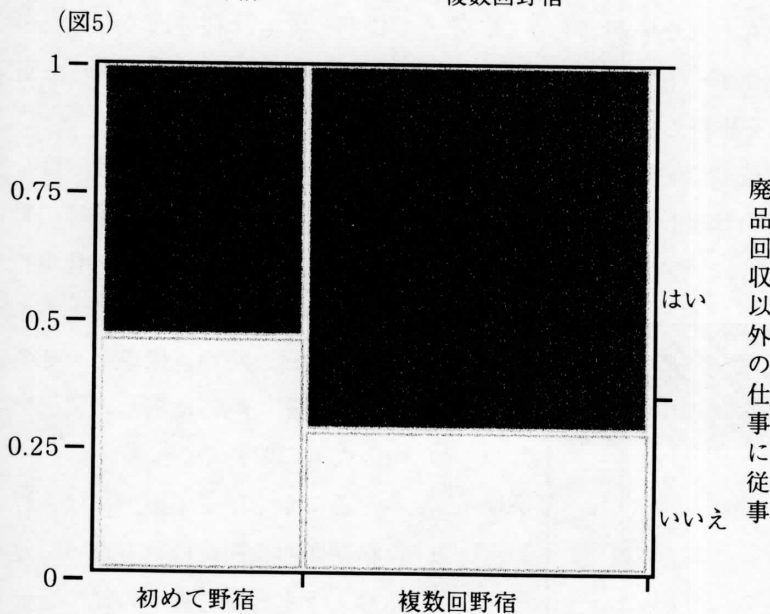
数」とのあいだの関連をも確認しておこう。

(図4)と(図5)は「野宿の経験」と「廃品回収」および「廃品回収以外の仕事」に従事しているかどうかとのクロス表を図示したものであるが、この2つの図からわかるように、野宿の経験回数についても、「廃品回収」という仕事と「廃品回収以外の仕事」(というよりも釜ヶ崎を經由した建設・土木作業への就労)とはまったく正反対の傾向をはっきりと示している。すなわち、廃品回収は主として「今回が初めての野宿生活」という人々によって担われており、それとは反対に、



廃品回収以外の仕事は過去に複数回野宿生活を経験した人々がその主要な担い手になっているのである。

先に構成した野宿生活の類型に基づいて言えば、廃品回収は「単発長期型」野宿の状況にある人々によって担われており、それに対して、廃品回収以外の仕事(釜ヶ崎経由の日雇慰労道)は「繰り返し短期型」の野宿生活者によって担われているのである。この二つのグループを分ける最も大きなファクターは、おそらく、先に指摘した「もう一つの空間」としての釜ヶ崎である。あるいは、釜ヶ崎との「距離」である。「廃品回収以外の仕事」に従事者は釜ヶ崎に近く、「廃品回収」従事者はそこからは遠い。両者は野宿生活へと入るその入り方と、野宿生活の「かたち」がかなり異なっているのである。その違いは決して釜ヶ崎での就労経験があるか否かということに帰因するのではない。



なぜなら、釜ヶ崎での就労経験がある野宿生活者とそうではない野宿生活者のあいだで、廃品回収に従事している人の比率に統計的に有意な差はないのである。廃品回収に従事している野宿生活者の多くもやはり釜ヶ崎での就労経験者である。そうではなく、どのような経過で野宿生活に入ったのかという点が重要なのである。

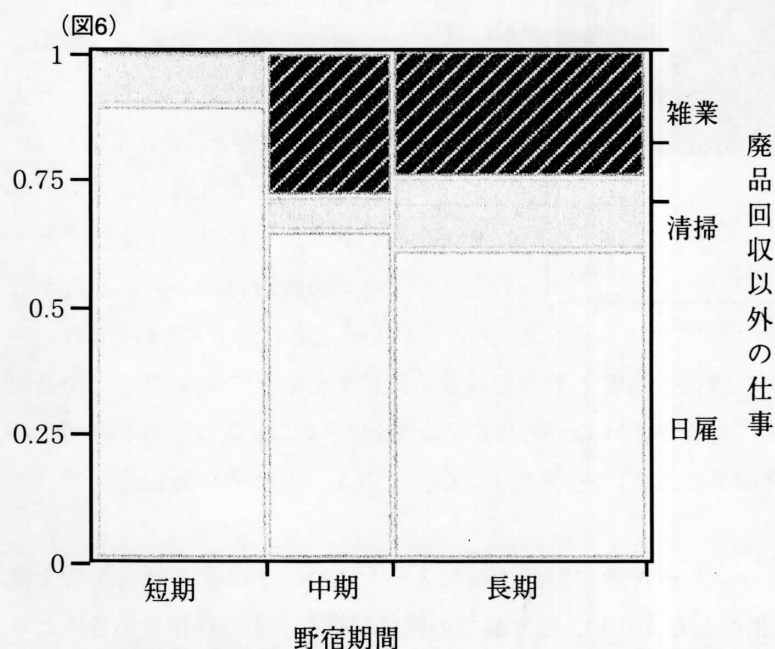
一般的に言えば、釜ヶ崎を經由しないで直接的に野宿生活に入った人は、そのまま野宿生活を継続して行く。それに対して、先にも指摘したように、釜ヶ崎での就労経験を有する野宿生活者にとっては、釜ヶ崎が一時的にはあれ野宿生活から脱出して「もどる」ことのできる空間として存在す

るのである。このことによって、「釜の生活」と野宿生活のあいだを往復するような特異な野宿生活の型が可能となるのである。そして、このような型の野宿生活と「廃品回収以外の仕事」とが結び付いているのである。この「往還」はあくまでも一つの可能性であって、それゆえ、現実には「釜の生活」からただちに長期の野宿生活へと入る元「釜の日雇」も多数存在するはずである。ここで指摘したいのは、野宿生活と「釜の生活」とのあいだの因果関係といったものではなく（もちろん両者のあいだには密接な関係があるのは当然なのだが）、「釜の生活」と結び付いた野宿生活の型なのである。

3. 「釜の生活」と野宿生活の仕事を媒介としたつながり

「廃品回収以外の仕事」に従事している野宿生活者は、その野宿生活の期間中も、「もう一つの空間」である釜ヶ崎とのつながりを維持しようと努力しているように見える。このつながりは、生活のいくつかの側面において確認することができるが、さしあたりここで確認しておきたいことは、彼等はまず第一に、「仕事」を介して釜ヶ崎とつながっている、あるいはつながろうとしている、ということである。確かに、このつながりは細くあやういものである。センターで仕事をみつけることはかなり困難で、ごくたまにしか仕事には就けないであろう。そして、そうであるがゆえに、彼は野宿生活から「釜の生活」へといまだもどることができないでいるのである。それにもかかわらず、彼等は釜ヶ崎で事を求めている。すなわち、彼等は「釜ヶ崎の」失業者もしくは半失業者なのである。もしかしたら、主観的にはどうであれ、客観的には彼等はもはや「釜の日雇」として必要な労働能力を失いかけているのかもしれないが、しかし、そうではあっても、彼等はこのつながりを維持している限り、野宿生活をサポートする釜ヶ崎の公式、非公式のさまざまな「サポート資源」を利用しながら自己の野宿生活を維持して行くことが可能になる。

さらに言えば、このつながりは、彼等の労働能力が弱体化しても、ただちに途絶するわけではない。次の(図6)は「廃品回収以外の仕事」に従事している71人の野宿生活者について、彼等の野



宿期間と「廃品回収以外の仕事」のサブカテゴリー（建設・土木日雇労働、特別清掃事業、その他の雑業）への従事との関係をみたものである。

ここから、まず第一には、野宿期間の長期化にともなって建設・土木日雇労働への従事者の比率が下がってゆく様子がうかがえる。すなわち、先に何度も指摘したように、野宿の長期化にともなって野宿生活者の「釜の日雇労働者」としての資質は低下するのである。しかし、この

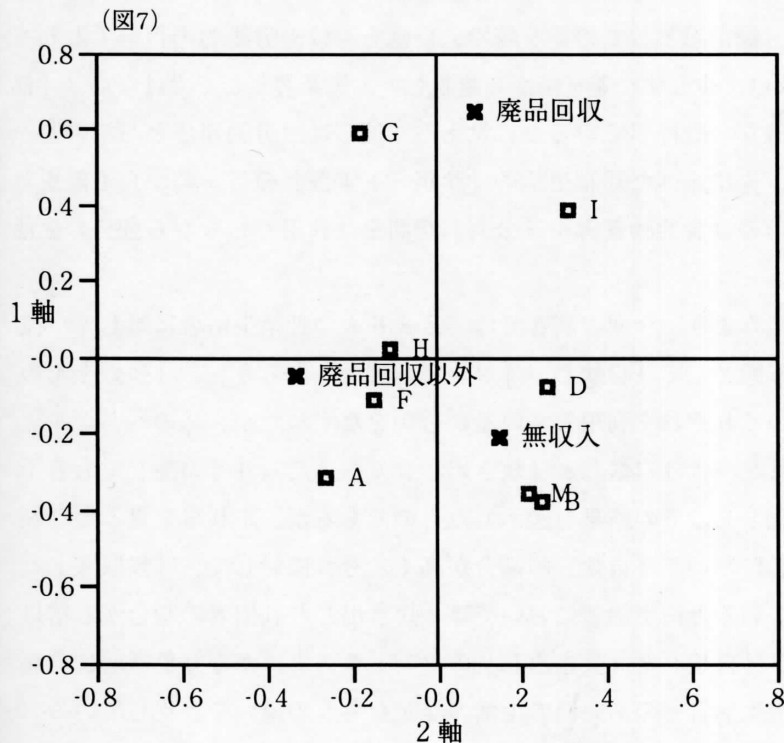
ような労働力の磨滅を下ざさえするようなかたちで、釜ヶ崎にはさまざまな「都市雑業」的雇用や

行政によって用意されている高齢者向けの特別対策事業である地区内清掃の仕事という「福祉的」雇用の場が存在している。これらの「仕事」は確かに、量的にも質的にもきわめて貧弱であり、それゆえそれだけで「釜の生活」を維持していくことができるような仕事ではまったくないが、それでも元「釜の日雇い」である野宿生活者を釜ヶ崎につなぎ止めておくファクターにはなっているのではないかと考えられる。

たとえば、1995年の夏に「釜ヶ崎反失業連絡会」によって特別清掃事業に登録している人びとを対象に行われたアンケート調査（サンプル数は405）によれば、調査時点（就労日）で野宿をしている人の比率が56.7%、前回の就労の日から調査日までのあいだに1日以上野宿した人の比率は78.5%となっており、ここにも「特別清掃事業」の主要な担い手が単なる高齢の日雇労働者ではなく、高齢の野宿している日雇労働者であることが示されている。すなわち、かなり労働能力が低下し、センターでの就労が困難になった高齢の日雇労働者でも就労可能な仕事が存在するということが、たとえその就労機会が月に2～3日でそれだけでは生活を維持することなど不可能なそれであっても、野宿を余儀なくされた元「釜の労働者」にとっては彼と釜ヶ崎をつなぐ重要な要素となっているのである。次に、「単発長期型」野宿生活者が中核をなしていると考えられる、「廃品回収」従事者について見ておこう。

4. 「廃品回収」に従事している野宿生活者

「廃品回収」に従事している野宿生活者の生活の最も大きな特徴は、おそらくその「孤立」性である。まず第一に、彼等は空間的に孤立している。次の（図7）は収入・仕事に基づく野宿生活者の基本3類型（「収入なし」層、「廃品回収」従事層、「廃品回収以外の仕事」従事層の3類型）と野宿場所とのクロス表を「対応分析（コレスポネンダンス・アナリシス）」によって分析した結果



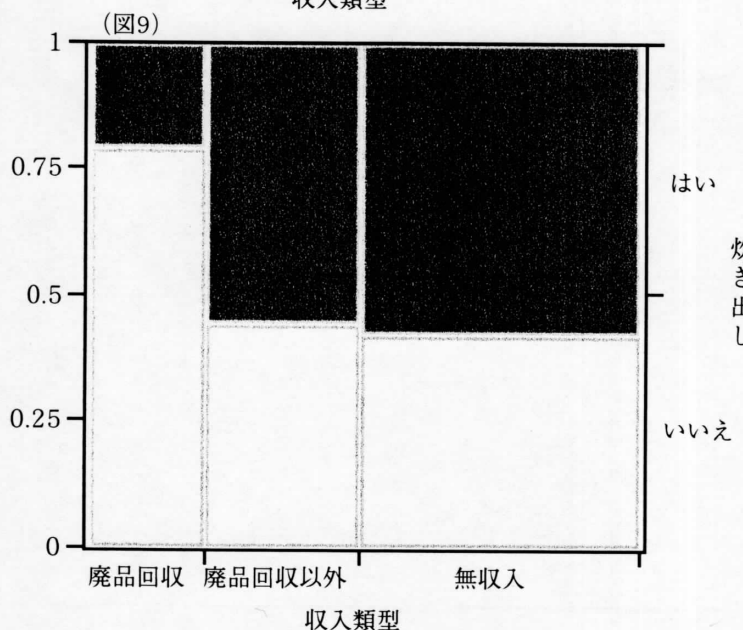
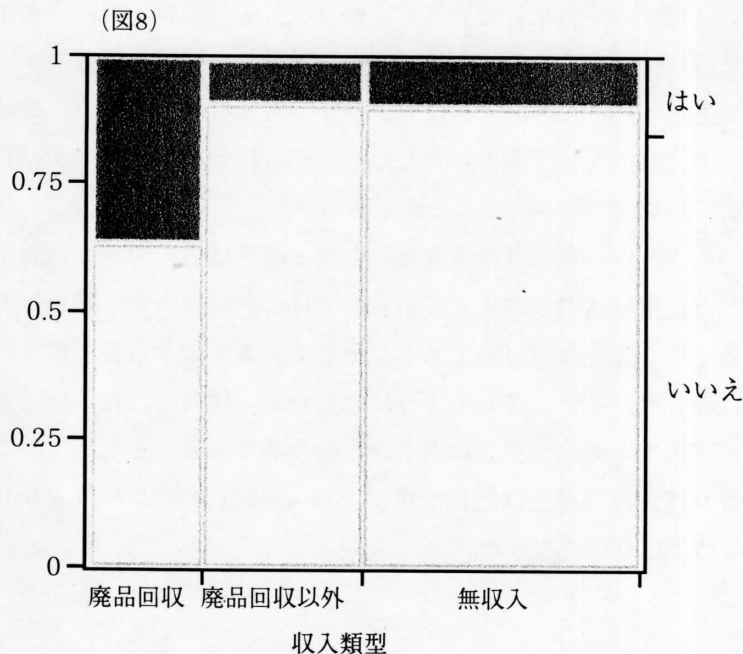
得られた、各カテゴリーのスコアを2次元座標上にプロットしたものである（図の見方は基本的に各点間の距離によって、各カテゴリーの近親性を測ることである。なお結果を単純化するために聞き取り人数が10未満の4地点と、他の地域の野宿生活者とはかなり異なった長期定住型の野宿生活者が大半を占める大阪城公園のデータは除外して分析した。グラフ上のアルファベットがどの地点を表しているかということについては、本報告書の第2章の「調査地点」の地図を参照してもらいたい）。

この図からわかるように、「廃品回収」従事者の野宿場所を示す点は、残りの二つのグループの野宿場所を示す点からはかけ離れた位置にプロットされている。具体的には、「廃品回収」従事者層を示す点は「G：JR新今宮駅北側～阪神高速恵美須町ランプ付近高架下」および「I：心斎橋筋アーケード～船場センタービル」を示す点の近傍に位置しており、それに対して「廃品回収以外」従事者層を示す点は「A：阪堺電車恵美須町駅周辺」、「F：日本橋でんでんタウン」、「H：南海なんば駅・地下鉄難波駅付近・歌舞伎座周辺」を結ぶライン（先に述べた釜ヶ崎から難波に至るラインである）の近辺にあり、また「無収入」層の点は「M：近鉄百貨店前・近鉄阿倍野駅地下道」、「B：天王寺公園入口付近」、「D：あべの筋」と一つの点の集まりを形成し、なおかつ、「廃品回収以外」と「無収入」の点を含むクラスターは相互に近接している。

以上のような、3グループの野宿場所の空間的布置は、3者の関係をかなりうまく表現しているようである。「仕事」を媒介として釜ヶ崎とつながっている（あるいはつながろうとしている）「廃品回収以外の仕事」への従事者は、空間的にも釜ヶ崎と「近い」場所で野宿をする傾向がうかがえるし、それに対して釜ヶ崎から「離脱」した、あるいは離脱しつつある「廃品回収」従事者は、釜ヶ崎との物理的接近という制約から逃れて、おそらくは廃品回収という仕事にとってより有利な場所と思われるところで、その野宿生活を確立しようとしているように見える。（図7）に示されている各グループの釜ヶ崎からの空間的距離は、同時にそのグループの釜ヶ崎との「社会的な結びつき」の表現でもあったと考えられる。

野宿の長期化に伴って、廃品回収への従事者の割合が増大するということと併せて考えるならば、「廃品回収」従事層の中核を構成しているのは、野宿の長期化によってもはや「釜の日雇い」として釜ヶ崎に「戻る」ことが不可能になった（あるいは困難になった）人々であると推測されるのである。聞き取りの過程でも「恵美須町→日本橋でんでんタウン→なんば歌舞伎座周辺」を結ぶライン上で野宿している人々のあいだには、「毎朝センターに仕事を探しに行く」と話している野宿生活者が多かったのに対して、「なんば」よりも以北で野宿生活を送っている人においては、そうした話はほとんど聞かれなかった。労働市場としての釜ヶ崎で、自己をもはや労働力の担い手として呈示することができなくなった人々は、少しずつ釜ヶ崎から離脱して、失業者としてではなく、「都市の野宿生活者」としての生活を確立・維持しているかに見える。彼らは、労働市場としての釜ヶ崎から離脱（脱落）すると同時に、先に述べた野宿生活の「サポート資源」の釜ヶ崎からも離脱してゆく。そして、都市の中で、都市の社会的諸資源や「公共」空間を「利用」しながら独自の生活のかたちをつくりあげるのである。

たとえば、「食事」について見てみよう。今回の調査では、236人の野宿生活者に対して、彼等が食事（あるいは食料調達）の形態として「自炊」、「コンビニ等からもらう」、「残飯を集める」、「炊き出し」、「その他」のそれぞれを利用しているか否かをたずねたが、このうちグループ間で統計的に有意に差が認められたのは「自炊」と「炊き出し」であった（「その他」でも若干の差が検出された）。（図8）と（図9）はその結果を図示したものであるが、これらを見ると「廃品回収」に従事している野宿生活者において「自炊」の割合が高く、それに対して、「無収入」と「廃品回収以外の仕事」に従事している野宿生活者においては「炊き出し」利用者の割合が2倍以上にもものぼっていることがわかる。「自炊」と「炊き出し」のコントラストはかなり象徴的に「廃品回収」グループとそれ以外の野宿生活者とのあいだの生活の「かたち」の違いを表現している。「廃品回収」従事者の「自炊」は彼等の生活の完結性あるいは自立性（さらに言えばその孤立性）



の表われであると解釈できる。都市の諸施設をたくみに利用しつつも、基本的に「自前」ある程度の食器や調理道具を用意し、そして「自分一人で」食事をする、こうした生活のかたちは、彼等が根底のところ、自分だけで生きていこうとしていることの表れであると考えられる。他者との関係やあるいは他者への依存を原則として必要としない生活のかたちを作ろうとしているかのようなのである。これに対して、「無収入」や「廃品回収以外の仕事」のグループは仕事や食という人間生活の最も基底の部分で社会的なネットワークに連なろうとしているように見える。そして、このネットワークの中心的なノードとして釜ヶ崎があるのである。

野宿生活を「中心としての釜ヶ崎」との「距離」という物差しによって分類すれば、釜ヶ崎の内部およびその周辺

に、失業日雇い労働者としての野宿生活者が存在する。彼らは、釜ヶ崎への「帰還」を期していわば「待機」している失業者であり（少なくとも主観的にはそうである）、先に述べた「往還」の途上にある人々である。彼らの野宿生活はあくまでも「一時的」「臨時的」なものであり、それゆえ、その野宿生活は多分に不定形である。釜ヶ崎に隣接する「日本橋のでんでんタウン」などでは、身の回りの生活用品を入れた紙袋を一つもって、ダンボールを敷いて野宿をしている労働者を見かけるが、この「紙袋一つ」という野宿のスタイルのうちに、この「不定形」性が表現されているであろう。

そして、この外側には、往還の繰り返しによって徐々に釜ヶ崎との距離が遠くなりつつある野宿生活者の存在を想定することが出来る。彼らは、「客観的には」もはやセンターで仕事を見つけることは困難なのかもしれないが、主観的には依然として自分を「釜の日雇い」である（ありがたい）と見なしている野宿生活者である。釜ヶ崎の「サポート資源」が最も大きな意味を持つ層は、おそらくこうした野宿生活者である。

そして、さらに外側に、完全に、「都市の野宿生活者」として独自の生活を維持していく人々が存在する。廃品回収従事者（「寄せ屋」）は、このような釜ヶ崎から離脱した野宿生活者の一つの典型であると考えることが出来るであろう。この野宿生活はもはや一時的なものではなく、持続されねばならないのであるから、そこでは必然的に、多かれ少なかれ、都市社会の中で「一人で」生きてゆくための「生活の型」（構造）が形成されることになるであろう。

労働市場としての釜ヶ崎に生じつつあると思われる「構造変化」や釜ヶ崎労働者の急速な高齢化に伴って、この「釜ヶ崎から離脱」した野宿生活者が増大しているのではないだろうか。彼らはもはや釜ヶ崎で日雇い労働者として生きていくことは不可能である。そして、釜ヶ崎から押し出されるようにして彼らは「周辺（＝中心）部」へと拡散しているように思われる。同時に、そこは「釜ヶ崎を経由しない」野宿生活者の生活空間でもある。そこは両者が出会う場である。そしてこのことは、こうした都市空間が従来の「寄せ場」の問題とは位相を異にする「問題」の出現の場となり始めているということの意味しているのではないだろうか。